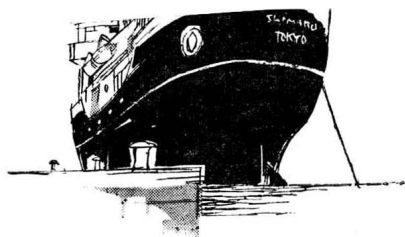


日本ミステリ・シリーズ

2

Nippon Mystery Series 2

衝突針路 高橋泰邦



早川書房

著 者 略 歴

大正14年5月東京に生る 昭和22年早稲田大学理工科

現住所 東京都中野区野方町1の795 公団住宅1の401号

主訳書

「恐ろしい玩具」E・S・ガードナー

「ハートの刺青」エド・マクベイン

「21世紀潜水艦」フランク・ハーバート（以上早川書房刊）

第二回配本

定価三三〇円

衝突針路

日本ミステリ・シリーズ

第二巻

昭和三十七年七月二五日 三版印刷
昭和三十七年七月三一日 三版発行

著 者 高 橋 泰 邦

発行者 早 川 清

印刷者 藤 卷 哲 士

発行所 早 川 書 房

東京都千代田区神田多町二〇二
電話 東京 (03) 566・二六〇・三八四
(03) 566・二八八 (編集)

用紙・四国製紙KK／クロス・日本クロ
スKK／印刷・日東紙工KK／製本・堅省堂

衝突針路

装帧 金森 達

此为试读, 需要完整PDF请访问: www.ertongbo.com

第一部

いくら走っても海霧の中だった。

三陸沖一帯が濃霧におおわれていた。親潮寒流と南風のいたずらだったか、それとも、はるか南方洋上にある熱帯性低気圧の前触れの現象だったか、とにかく広く厚い濃霧圏だった。

多聞丸では、霧の中で、航海当直の交替がくりかえされた。

霧中信号——二分をこえない間隔をもって、四秒ないし六秒間の長音一発を吹鳴する霧中信号が、かぎりなく反復された。

八月二日の正午には、二等航海士の私が当直に立った。昨日の午後当直も霧の中だった。夜半からの泥棒ワッチも霧の中だった。そして今も、霧はまだ行く手に深いようだ。

午後三時——時鐘が六点を打って間もなく、私は、左舷船首前方で、遠い汽笛を聞いたように思った。私は全神経を耳に集中して、霧の奥へ耳をすました。目を閉じて耳をそばだて、永くもどかしい二分間を待った。しかし、次の汽笛は聞えなかった。空耳だったろうか、と思った。

船首楼と、両舷の張出しに立ててある監視員からも報告はなかった。念のために、本船の汽笛吹鳴の間隔を不規則にさせてみた。やはり何も聞えなかった。エンジンの鼓動と、船首が分ける

波音のほか、聞えるものはなかった。やはり空耳だった、ときめた。

いくらか風があった。霧がまいた。甲板^{オウ・デッキ}上積みの材木の上を、はいまつわりながら、左から右へ流れていた。材木は、両舷に立ち並んだ支^{スツ・ギ}柱の間に、二メートル以上も積み重なり、ワイヤーで厳重に縛められて、黒々と濡れていた。材木と、いまは一続きの、船首楼が水墨画のようで、間を流れる霧の濃淡によって、たえず墨の度合がかわっていた。

材木の厚い積み重なりの中から、マストが生えていた。マストの上では、航海灯が、前方の霧に、ぼんやり虹の量^{かき}を投げていた。前日から、他の船灯もすべて点けはなしになっていた。操舵室の張出しの外側では、そこだけ、霧が舷灯を映して、左は赤く、右は緑に染まって流れた。

操舵室の、左舷よりにある機関伝令器^{メカニカル・オーダー}は、「前進微速」に指針がセットされている。しかし、船は南下する親潮寒流にのっているから、半速の六ノットぐらいは出ている勘定だ。霧中では、危険なスピードだった。

昨日から、船位を確認しようにも、船^{ベ・ア・リ・ン・グ}の方位を測る陸標が見えないので、測程儀^{シ・フ・コ・グ}に表示される航過距離をもとに、潮流、風圧、コンパスの自差などを考慮にいて、推測航法をとっていた。多聞丸にはレーダーがなかった。盲人が手探りで歩くようなものだ。もちろん、出来るかぎりの処置はとってある。経験に裏づけられた自信もなくはない。しかし、どこかに、運天まかせの要素が残されていた。

私の計算では、次の当直中に、金華山沖を航過するはずだった。そこで灯台の霧笛を聞けば、船位を確認する手段もでてる。

さっき聞いたように思った、汽笛らしい音は、灯台の霧笛だったろうか？　しかし、それなら

音の調子がちがったはずだし、等しい間隔でくり返されたはずだ。霧笛は、牛が高く咆えるような音調だ。

それとも他船の霧中信号だったろうか？　しかし、それなら二分以内に、くりかえされたはずだ。一発吹鳴したきり沈黙したことは解せない。

やはり空耳だったのか？　丸二日も、霧の奥へ、全身を耳にして、神経を緊張しつづけていれば、幻聴も起ころうというものだ。

私は疲れを感じていなかったが、やはり芯が疲れているのだろう、と思った。船長が参ったのも無理はない。

大貫船長は、さっきまで操舵室の中で、頑張っていた。食事も此処へ運ばせて取った。狭視界航法は、船長自らが操船指揮に当たらなければならぬ。しかし、丸二日も霧の中だ。すでに人間の生理の限界を超えた激務だ。私や一等航海士のすすめもあって、正午に、私が当直に立つて間もなく、

「それじゃ、しばらく休ましてもらるか」と言って、二日目に個室へ降りて行った。

上わ背はあるが痩せぎすの体格で、首が細く長い。時々、軽い咳をする。肺をやられているのではないか、と私は思っていた。

「何かあったら、すぐ呼んでくれたまえ」

と、言葉を残していった。

船位を推測する資料を得るか、他船の霧中信号を聞いたら、すぐ船長に報告しなければならぬ。しかし、霧の奥は沈黙しつづけていた。船は、雲母の粉をまいたような霧の奥へ、船首を突

っこんでいく。

全船が重く濡れていた。監視員たちの黒いゴムの雨合羽が濡れて光っていた。私も合羽の中で、体がむれて、びっしょり汗に濡れていた。私は右舷の張出しと、操舵室の海図テーブルの間をたえず往き来していた。時々、操舵手の前にある、操舵用コンパスをのぞいた。一時もじっとしていなかった。いや、そうしていられなかった。

張出しへ出るたびに、鼻や耳の奥まで濡れた。士官帽のひさしに雫が下がり、海図へ身を屈めるたびに、幾滴か落ちた。頭巾をかぶる気には、しかしなれなかった。見張りの耳だけに頼ってはいられないからだ。誰も口をきく者はなかった。

船首楼の、霧にけぶった人影も、じっと立って動かない。知らない者なら、艤装の一部だと思っただかもしれない。

単調な緊張感に、みな耐え難くなっていたにちがいない。間を置いて繰り返される汽笛も、腹^{はら}綿^{わた}にひびく強さにかかわらず、単調さを募らせる以外のなものでもなかった。

こんな場合、できれば機関を止め、投錨仮泊するか漂泊するかして、視界の回復を待つのが上策だ。しかし、できればの話だ。それをするには、荷主と船会社が、大きな負担を覚悟しなければならぬ。六千四百トンの貨物船が、八千二百トンの材木を積んで、霧のはれるまで、ぽかんと浮かんでいることは許されるはずがない。強いて安全を計ろうとすれば、船長は鹹をかける覚悟が必要だ。それを敢えてする船長は、よほどの大人物か、まったく自信のない船乗りだろう。幸か不幸か、多聞丸の大貫船長は、小心で忠実で、自信も経験もかなりある、ごく普通の船長だった。こうして大方の貨物船は、最大の注意と、相当の自信と、そして運賦天賦の要素をのせ

て、海霧^{ガス}の中でも走りつづけるのだ。

船橋時計が三時半をさした。予備員の操舵手が時鐘を七つ打った。

霧のまき方に変化がおこった。風が強くなったのだ。気のせいか、霧が明るくなった。

「二等航海士^{セグンドマッサー}、あがるかも知れませんか」

と、張出しの見張り員が言った。霧よりも、まず気がはれはじめた。

「おれも、そう思ったところだ」

と、私は、霧中信号が止むのを待ってから答えた。ほっとしていた。急に、肌を伝う汗が意識された。もうしばらく様子を見て、船長に報告しようと思った。

船首楼の、薄い墨絵の人影も動くようだ。

「やれやれつてとこですね」

と、予備員の操舵手が言った。

「これで明日の晩は、横浜^{ヨコハマ}で一杯やれるな」

と、見張りの水夫が笑った。

「おれはまず、二等航海士^{セグンドマッサー}の肩より厚いテキを食うな」

と、予備員の操舵手が舌つづみを打った。

私は海図へ両脚器を立てながら、黙って笑った。

「色気のねえ奴等だな」

舵輪を握っている操舵手までが緊張を解いた。

「お前等、食い気一方か」

「ばか、テキを、なんのために食うか知ってるか」

「腹がへっては戦ができぬってね」

と、張出しからまぜかえす。

「お母ちゃん、だいぶたまっちゃってるからな」

「そのこと！」

みなドツと笑った。

「まだ霧はあが^{ガス}つとらんぞ」

と、私は咎めたが、眼元で許していた。

みな口をつぐんで、任務にかえた。

「金華山の霧笛が聞えるかも知れんから、注意してろよ」

そう言つて、私は前窓よりにある、伝声管へ身をこごめた。

おいら岬の灯台守は、

妻と二人で沖行く船の……

誰かの鼻唄を背に聞いて、

「エンジン……エンジン！……」

と、伝声管へ呼びかけた。

「エンジン」

と、久保二等機関士の声で、応答がきた。「二等航海士か……」

「霧^{ガス}があがるかも知れない。視界が開けたら、全速^{フル}にかけるから、そのつもりでいてくれ」

「諒解。明日の昼には、横浜に入れるかな？」

「おそくとも、二時までには持ち込めると思う」

「そいつは有難い、全速^{フル}にかかったら、うんときばらせるから、早く持ち込んでくれよ、二等航海士^{セコンドフサイ}」

「諒解。妹さんの誕生日に間に合うようにな」

久保二等機関士の妹は、東京に下宿して、女子大に通っていた。彼は京浜港へ入るたびに、妹に会うのを楽しみにしていた。彼は郷里の熊本に、妻を置いていたが、どういう訳か、妻を呼んだことはなかった。妻の方も来なかった。私は理由を詮策したことはなかった。

「妹さん、大人になったろうな。あの年頃に、二年会わんと、見違えちゃうからな」

「いやあ、子供のような、大人のような……半端なところさ」

二年前に、若松へ入ったとき、まだ郷里の高校へ通っていた彼女が、一人で、船へ兄を訪ねて来たことがあった。私はその時はじめて紹介されたのだが、半熟のザボンのような、明朗で活潑な少女、という印象が残っている。もう女を思わせる発育のいい、上わ背のある体を、じみな制服につつんで、まだおっぱ髪だったのを覚えてるが、顔ははっきり思い出せなかった。

「もう、チーちゃんなんて呼べないな、こんどは」

「よかったら、二等航海士^{セコンドフサイ}も、一緒に来ないか、狭い下宿だが」

「いいかな、久しぶりの兄妹水入らずの処を」

「妹だぜ、二等航海士^{セコンド・ファサ}。間違わんでくれよ」

と、久保二機は、明日を楽しむ笑い声だ。そんな言葉の端々にも、この兄妹の間に通うかくべつの愛着がこもっていた。そういえば、この兄妹は早くから両親を失って、頼り頼られて生きて来たのだった。

「じゃ、お邪魔する」

「一度、会わしておきたかったんだ。大きくなったところでね」

「何時に行ったらいいかな」

「地図をかくから、先に行つとつてくれてもいい。妹は夏休みで、昼間もおると思うから」

「いや、そりゃいかなよ、二等機関士^{セコンド・エンジンヤ}」

「構わん、かまわん。いかなと言うような淑かな代物じゃないし、二等航海士^{セコンド・ファサ}なら構わん。それに、おれは、妹の処へ行く前に、医者へ廻ってくるから」

「のどの具合、やっぱりおかしいかね」

「うん、いや、大したことはないと思うが」

久保二機は、最近、咽喉が痛むと訴えていた。眼のふちも赤く爛れているようだった。貨物船に船医はいないし、二等航海士が薬品管理をしているのだから、原因も治療法も分りっこない。

「じゃ、ケーキでも買つて、先に……」

見張りの声で、私は絶句した。

「二等航海士^{セコンド・ファサ}、右舷船首の向うで、変な音がします」

私は右舷の張出しへ走った。霧の奥へ、百メートルほど海面がひろがっていた。視野がひらけ

ているのだ。

待つ間もなく、妙な音が、まだ霧に包まれている向うから伝わってきた。金だらいでも叩きつづけるような音だ。

「左旋回……大舵に取るな」

命令と注意をつづけて言った。

「ポール・サー」

操舵手が、コンパスを見ながら、軽く舷輪を回した。それを見届けてから、私は、
「漁船がいるんだ」

と、独りごちて、船首楼の方へ、「諒解」と、腕で円を描いて見せた。

「こんな霧の中で……無茶やるな」

けたたましい金属音が、霧の中で、右舷にかわっていくようだ……

「航路筋まで出てからに……」

私は舌打ちをした。

「漁師の世界も、世知辛いんでしょう」

予備員の操舵手が片脇から海をのぞいていた。

私は苦笑した。

「胆を冷やすぜ、まったく」

と、操舵手が私のところを代弁した。

霧がまきかえって、波山をなめながら、薄れていた。

見上げる上空は、まだまだ、眩しく霧がとざしていた。その上には、八月の午後の太陽が、輝いているにちがいないのだが……。

そのときだ。注意力をすべて耳に集めて、いつ聞えるかも知れぬ他船の汽笛や、漁船の霧中信号に、機敏に応じられる心づもりのできていた私も、見張員たちも、思わず自分の耳を疑った。あまり間近く大きな汽笛だった。本船のかと、振り返った者がいたくらいだ。

あまりにとつぜんだったとはいえ、あまりに間近だったとはいえ、それこそ耳を向けていたはずの音だったのに、とっさの判断がつくまでに、二、三秒の空白があった。

「短発で答えろ！」

私は、片脇に口を開けている操舵手をどやしつけた。操舵手は、咽喉の奥で声をつまらせて、はじかれたように、汽笛吹鳴の引き綱へ飛びついた。

多聞丸の汽笛が鳴るより早く、相手の汽笛が、短かく間切って、五発つづいた。右舷船首前方の霧の中から、その音源は接近して来た。

私は、音のする霧の奥を凝視したままの姿勢で、大きな地声を張り上げて、「エンジン・ストップ！ 船長を呼べ！」

と、怒鳴った。

見張員が船橋樓の鉄梯子を駆け降りた。私自身は、機関伝令器に飛びつき、指針を「ストップ」に回し、つづいて、「後進全速」へ回した。次の瞬間、伝声管へも同じ指令を怒鳴った。

「後進全速！」

「フル・スターン！」